

整備機器

新商品

小野谷機工(株)

ハイエンドホイールバランサー

「ダイナマックスTBm-MAX」

小野谷機工は1月にトラック・バス用の超偏平ワイドシングルタイヤからライトトラック用タイヤ、乗用車用タイヤまで幅広く対応したホイールバランサー「ダイナマックスTBm-MAX」を発売した。新モデルは21.5インチの大型タッチパネル液晶モニターを採用して作業性を大きく向上させたほか、安全作業や軽労化につながる機能を備えたハイエンドモデルとなる。開発を担当した商品開発本部技術開発部兼サービス機器営業本部販売企画部の杉本和則部長に、新製品の主な特徴を解説してもらった。

ホイールバランサー「ダイナマックス TBm-MAX」の適応リム径は10〜30インチ、適用リム幅は2〜20インチ。測定重量は最大250kg、最大外径1100mmとなっており、超偏平タイヤを含むトラック・バス用タイヤから乗用車用タイヤまで幅広く対応させた。小野谷機工のライオンアップ中で「ハイエンドモデル」と位置付けられており、視認性が良く直感的な操作を実現する大型タッチパネル液晶モニターと各種センサーを搭載して新登場した。

この液晶モニターは新製品の大きな特徴で、これだけ大きな画面、タッチパネルを備えた機種は市場でほぼ見当たらないという。杉本部長は「液晶画面が小さいと操作するボタンも小さくなってしまい、作業がやりにくくなるが、このモデルに採用したモニターは大きく、使い勝手が良い」と自信を示す。タッチパネルは21.5インチで、パソコンのモニターを縦に配置したようなイメージだ。カラー表示で日本語に対応しているほか、ハイエンド機に相応しい質感も高めている。薄手のものなら手袋をしたままでも対応が可能だ。

実際の作業をデモンストレーションしてもらった。まず、タッチパネルで「トラック・バス用タイヤ」「乗用車用タイヤ」と測定するタイヤのカテゴリを指定する。「ダイナマックス TBm-MAX」は低床内蔵式リフトが標準装備されている

ため、重量のある大型タイヤを簡単にセッティングできるのも安心だ。各ホイールの取り付けにはセンサーオフセット10穴ホイール(ISO)、TB10穴ホイール(ISO)、TB8穴ホイール(JIS/ISO)が標準となっており、LTホイール(JIS/ISO)もオプションで用意した。通常はセットした後にはホイールサイズやウェイトが標準装備されているにも配慮した。

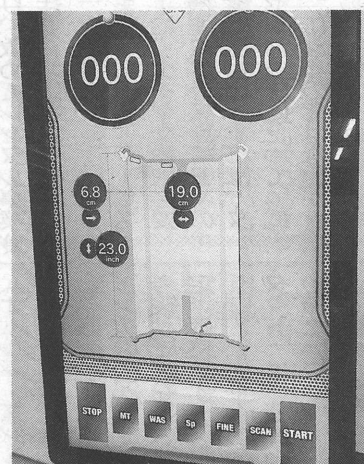
また、計測は一般的には5グラム単位で表示されるが、よりシビアな情報が必要な場合は「フィインスイッチ」を押すと1グラム単位で確認することもできる。

測定時の回転スピードはトラック・バス用タイヤで約90rpm、乗用車用タイヤでは約110rpmとなっており、「回転が遅ければ、その分、

機械が止まるのも早い。作業の安全性が高まり、トータルで考えれば時間を短縮につながる」と杉本部長という。

測定が終了すると同時に、イン側の修正位置を自動で検出、回転が停止するよう組み合わせたアンパランスが相殺されてウェイトの使用量は最小化できる。その組み合わせを指示してくれるもので、軽労化にもつながると説明する。

さらに「SPスイッチ」は機械のコンディションを作業員自身が確認でき、何らかのエラーがあればモニターで分かるようになっている。電話でサポート対応を受ける際など、「何が表示されているか」など情報を共有できるため効率化にも寄与するだろう。



大型モニター

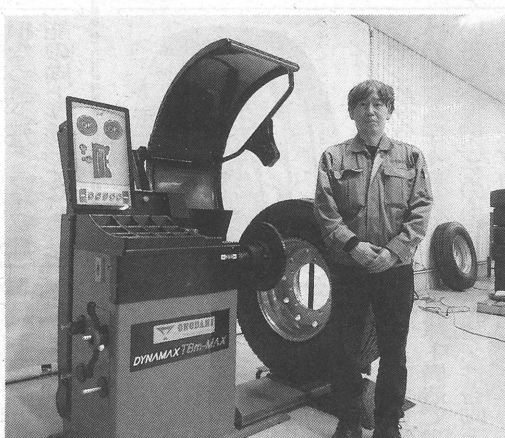


ワイドシングルから乗用車用タイヤまで対応



大型モニター

ター備えた上級機誕生



「安全性向上や軽労化にもつながる新製品になった」と自信を示す杉本部長

また、計測は一般的には5グラム単位で表示されるが、よりシビアな情報が必要な場合は「フィインスイッチ」を押すと1グラム単位で確認することもできる。

測定時の回転スピードはトラック・バス用タイヤで約90rpm、乗用車用タイヤでは約110rpmとなっており、「回転が遅ければ、その分、

機械が止まるのも早い。作業の安全性が高まり、トータルで考えれば時間を短縮につながる」と杉本部長という。

測定が終了すると同時に、イン側の修正位置を自動で検出、回転が停止するよう組み合わせたアンパランスが相殺されてウェイトの使用量は最小化できる。その組み合わせを指示してくれるもので、軽労化にもつながると説明する。

さらに「SPスイッチ」は機械のコンディションを作業員自身が確認でき、何らかのエラーがあればモニターで分かるようになっている。電話でサポート対応を受ける際など、「何が表示されているか」など情報を共有できるため効率化にも寄与するだろう。

自動化により、ピットで誰が作業しても同じ結果を得られる「ダイナマックス TBm-MAX」安全性と作業性を両立したモデルとして、軽労化や作業品質の標準化など、現場の課題解決につながっていくと期待されている。